山田詠美『海の方の子』の教材価値 ―一人称語りのトリック―

A Study on "Umi-no-hou-no-Ko": Trick of the first person narrative

仁野平　智　明
NINOHIRA Tomoaki

一、はじめに

山田詠美の『海の方の子』は、九歳のころの自分を振り返って「私」自身が語る一人称語りの小説である。平成十年に東京書房『精選国語Ⅰ』において初めて高等学校の教材として採録され、次いで桐原書店が平成十五年に採録、その後、現在までこの二社の教科書に採られ続けている（1）。こうした、語り手が自らの体験を回想する一人称語りの小説を教材として取り扱う際に求められるのは、まず第一に、語り手の語る動機をとらえることである。人は自らの体験すべてを等価にみなすわけではない。その経験が自分にとって大きな意味をもつとき、語るに足る価値を与え、語りたいという意志をもって語るのである。語り手が人格をそなえた作中人物である以上、語られる内容には語り手による恣意的操作、つまり選択意識が働いていることを忘れてはならない。第二に、当時の出来事を現在の語り手が語るという二重構造を把握したうえで、当時の思いと現在の思いとの関係性に配慮する必要がある。語り手は当時のことを対象化して語ってはいるものの、現在の思いが回想内容に分かちがたく入り込むことが往々にして起こるからである。そして第三に、語り手は自分の知り得たことしか語れないという構造を把握しておくべきである。語り手は回想部分における主人公でもあり、全知的視点の語り手ではない。語り手が、ある出来事について自らの経験した側面しか語り得ない存在である以上、語られる対象や内容は、出来事全体に対して常に限定的部分にとどまるほかない。

これらの三点について、先に示した二社の教師用指導書ではどのような指摘がなされているのだろうか。まず、東京書籍の指導書を見るに、語る動機についての解説はどの項目にも見当たらない。そして、回想して語るという構造については次のようにある（2）。

今でこそ…小さなころの自分を表現することができる――話の内容が、成長後の「私」（語り手）が、九歳のころを振り返ったものであることを示す。前文の「こまっしゃくれて」には、単に大人びているというだけではない、利口ぶって生意気だという意味も含まれる。この語や「顔を赤らめながら」という表現から分かるように、自らを人の上に立つ存在だと意識し、しかるべく振る舞おうとしていた当時の自分を、現在の私は批判的に見ているのである。

ここでは、当時の思いと現在のそれとを区別して読む必要性が示され、「現在の私は批判的に見ている」として当時の自分と現在の語り手としての自分の関係性を確認してはいるものの、その「批判」の内容には立ち入らない。同指導書「教材のねらい」には、「自分とは異なる個性・価値観を持つ他者との出会いによって、新しい価値観を発見するという、成長の物語」とあり、語られる対象である九歳当時の主人公・久美子の「成長」に焦点が当てられ、主にその物語内容に対して教材価値を見出していることがわかる。ゆえに、語り手の存在はさほど重視されていないのであろう。

桐原書店の指導書にも語る動機についての解説は見当たらず、回想と語りの関係性や語り手の意識については、次のように示されている（3）。

【こまっしゃくれて】「私」という子どもを最も端的に表現した言葉であることを確認したい。以下に「私」が自分について語る部分が長く続くが、それらすべてを集約したものとして「こまっしゃくれる」という言葉が冒頭にあるのである。

この解説では、語り手が「『私』という子どもを最も端的に表現」していることと、九歳当時の「『私』が自分について語る部分」とが、混在したまま区別なく、結局のところ「こまっしゃくれる」に集約されるとしている。そして同様の解釈は、同社指導書の次の記述にも表れている。

【問】「私」はどんな人間であったと書かれているか。すべて抜き出せ。

→・こまっしゃくれていました。

・周りの子どもたちよりもいろいろなことを知っていると、自負していました。

・体の小さな大人としての自分の責任を、全うすべく生きていました。

・人の気持ちをよく理解し、もののわからない子たちを正しい方向に導いてあげ、また、自分の人よりも多い知識を分け与えてあげることに毎日を費やしていました。

（中略）

・人生を軽く見ていた…「世の中は、悪くない」

▽「私」が九歳であった過去の自分を振り返った形で記述されている点をおさえた上で、これらの記述に共通して見られる点を生徒に考えさせる。

この発問例と解答は、「周りの子どもたちよりもいろいろなことを知っていると、自負していました」というような九歳当時の自己の認識と、「こまっしゃくれていました」「人生を軽く見ていた」というかつての自分に対する批判とを区別なく同次元において扱い、「これらの記述に共通して見られる点を生徒に考えさせる」ものとなっている。「『私』が九歳であった過去の自分を振り返った形で記述されている点をおさえた上で」とはあるものの、単純に語りの形態を確認するレベルでしかなく、語りそのものよりも事柄として抽出される「私」の人物像を把握することが求められている。

本論は、先に示した、回想型一人称語り小説の教材理解において欠かせない三点をふまえ、まずは『海の方の子』の語り手における語る動機を明らかにし、次いで、九歳当時の主人公とそれを回想する現在の語り手との関係性をとらえ、それとともに、語られたことによって結果的に浮かび上がる語られていない内容に着目することで、『海の方の子』の教材価値について考察しようとするものである。

二、語る動機

一人称語りの小説において語り手が回想する内容は、意識的かどうかに関わらず、すべて語り手によって取捨選択されたものであり、語り手の価値判断が敷衍されている。そして、そうした語りを進める原動力となっているのが、語る動機である。例えば、高等学校の定番教材である『こころ』〈下〉や『舞姫』の場合、『こころ』〈下〉は、青年に思いを託して宛てた先生の遺書であり、また、『舞姫』は、「人知らぬ恨み」を「銷せん」として記した豊太郎の手記となっており、主人公によって語りの動機が明確に述べられている。

一方、『海の方の子』では、語り手自身が語る動機について、遺書や手記というように自らの状況設定を具体的に明示した部分はないものの、冒頭部分の表現から、語り手がどのような思いで語り出しているのか、その一端を読み取ることができる。「私は、こまっしゃくれていました。」という一文で始まり、「今でこそ、そんなふうに顔を赤らめながら、小さなころの自分を表現することができるのですが」と語り続けられて、小説は始まる。この「今でこそ」、「小さなころ」という自らの状況を指し示す対称的な二つの表現によって、回想内容と語る現在との間にある程度の時間の経過が示されているわけだが、これは、単に時間的な隔たりを示すのみならず、語り手の心理的な隔たりと連動した表現としても読むことができるのではないか。意味内容として「今」とは異なる過去の時点を示すだけならば、「子どものころ」「小学生のころ」「九歳のころ」などとすることも可能である。それに対し「小さなころ」という表現には、かつての自分を「小さな」存在とみなす価値判断が作用している。これはさらに、九歳当時の久美子がそれ以前に東京に住んでいたころについて「小さなころ」と表現する意識構造と通底している。以前の自分に対して「小さい」という形容詞をともに用いる久美子と語り手に共通しているのは、現在の自分の「大きさ」、すなわち、「成長」に対する強い自覚である。また、「顔を赤らめながら」に着目すれば、当時の自分に対して語り手が、気恥ずかしいながらも振り返って語れるほどの距離感を有しているところに、今の自分の成長を自覚している語り手の意識を読むこともできる。恥じ入りながらも自らの失敗談を語れるのは、羞恥の最中ではなく、自分の中である程度の対象化がなされた後のことであろう。さらに、この「顔を赤らめながら」が語り手の感情のみならず身体性をともなう表現で

もあることに注目したい。冒頭において、語り手が自らの具体的な表情や様子をイメージさせる情報を伝えて語り出していることを重く見るならば、語る内容とともに、語る自分の存在をも示したがっている語り手の姿が浮かび上がってくる。

次に、語りの口調に着目して、語る動機を考えてみたい。基本的には敬体で語られており、言葉遣いが平明で口話的な表現も多いため、語り手が今まさに語り聞かせているものと読者に感じさせる。敬体で「〜た」「〜でした」とやわらかに語りを展開しながらも、語り手は要所要所で「その年齢にして決心していたのです」「あってはならないことなのです」「大人だったからなのです」として、「〜のです」「〜のでした」という自らの判断を含んだ表現を用いている。出来事として伝えられる事柄と語り手の判断という位相の違いを超えて、当時の出来事に現在の自らの価値判断を頻繁に付加するこの語りからは、語る内容をコントロールし、物語世界を統御しようという語り手の強い意志を想定することができる。

このように、物語の内容や表現を大きく左右する語り手の語る動機に目を向けず、回想して語られた事柄を単純に物語内容として読むならば、読者の視点は語り手と一体化し、語り手が完結した出来事を装って提示する世界をそのままに受容する、物語没入型の主人公主義的な読みに終始してしまう。語る動機への着目は、こうして批判される向きの多かった従来の読むこと指導に新たな視座を与えることとなろう。

また、語り手の意識のありようは、「先生方」「くださいました」「お友達」という言葉遣いからも読み取れる。むろん、「先生方」の行為を表現するには敬語がふさわしく、「友達」を丁寧に表現すれば「お友達」となる。しかし、これらは規範的には正しいものの、日常において実際に話される言葉としてみれば、ことさらに改まった感を抱かせるのも事実である。こうしたフォーマリティを重視した言葉遣いから、自らの姿をより高尚に見せようとする語り手の強い自意識がうかがえるのではないか。

以上のように、冒頭部分に示された言葉、語りの口調、そして言葉遣いについての検討から、現在の自己の成長を示唆し、超越的存在であると自覚する自己をアピールすることで、強い自意識を満足させたいとの思いを、『海の方の子』の語り手の語る動機として読むことができる。

三、主人公「久美子」と語り手の関係

ところで、実際に、語り手は当人が自覚するほどに成長したのだろうか。そして、「ある日」の出来事は「私」にとっていかなる変化をもたらしたのであろうか。これらを検証するため、本節において、九歳当時の主人公久美子の思いと現在の語り手の意識とその関係性とを、時系列に沿って見ていくことにする。以下、九歳の時の「私」を久美子、今の「私」を語り手と表記する。

（一）冒頭～静岡で

冒頭部分では、「小さな子供たちの中にいる体の小さな大人としての自分の責任を、まっとうすべく生きていました。」「もののわからない子たちを正しい方向に導いてあげ、また、自分の人よりも多い知識を分け与えてあげることに毎日を費やしていました。私は、小さいころから、人の上に立っている自分というものを感じ続けていました。」「私は、誰にでも愛されるように、また、誰をも愛すように常に努力している大人だったからなのです。」など、久美子の当時の思いが語られている。「導いてあげ」「与えてあげる」（傍点引用者）という表現は、「人の上に立っている自分というものを感じ続けていました。」という部分と呼応し、久美子の自覚する自己像を端的に伝えるものとなっている。それを、語り手は「こまっしゃくれて」いたととらえ、「既に、人生を軽く見ていたと言えるでしょう。」と批判的に振り返っているのだが、例えば次のような語りには、同様の批判が見られない。

彼らは、私のことを、すぐに好きになりました。だって、子供って、とても敏感です。溶け込めないそぶりを少しでも見せてしまう人間には、拒否反応をしめすのです。私は、そのことをよく知っていました。私に関しては、いじめられるなどということは、あってはならないことなのです。

当時の思いとして語られている部分であるが、「子供って、とても敏感です。溶け込めないそぶりを少しでも見せてしまう人間には、拒否反応をしめすのです。」という子供の性情に関する部分に対し、語り手は、「こまっしゃくれ」

た久美子の観点として批判することをしない。それは、これを過去の自分の考え方として「そう思っていたのです」などと対象化せず、まるで既定の事実のように語っていることに起因する。ここにおいては、語り手の認識は九歳当時の久美子と一致し、変化は見られない。

また、教室内の子供たちの人間関係に関しては、次のようにも語られている。

私のように、何度も学校を変わっていると、その教室で、いったい、誰が好かれているのか、また、誰が忌み嫌われているのかが、すぐにわかるようになるのです。私のこの勘は外れたことがありません。教室には、必ず、権力を持つ数人というのがいて、他の子供たちをまとめています。私は、子供たちの誰が、誰に属しているのかを、転校して数日のうちに、観察し、それを頭の中で整理して、資料を作り、心の中に常備しておきます。そして、必要な時には、それを引き出して、人間関係のために役立てるのです。そして、いろいろなグループが、とても、つまらないことで争いを起こしたりする時、そのグループの隙間を縫って皆を説得します。かといって、私は、誰にも媚びたりはしません。私は、私でいるということを、常に、他の子供たちに証明し、嘘偽りのない堂々とした様子で、彼らの信頼をかち得ることに成功していました。

この部分が回想でありながら、最後の一文を除き、すべて現在形で語られているのもまた、語り手の思いと九歳の久美子の思いとが重なり合い、いまだに不可分な状態にあるからだろう。語り手は、転校を数多く経験しているがゆえの習癖の解説としてではなく、また、過去の、そして現在の自分への批判として語っているのではない。「この勘は外れたことがありません」と誇らしげに語る部分をはじめとし、むしろ得々として語り続ける。語り手はかつての自分を、「こまっしゃくれ」て「人生を軽く見ていた」子供としながらも、その自分の大人びた賢しさに愛着をも感じている。この点において語り手は、過去として語っていながらも久美子を対象化することができないのである。

（二）哲夫への接近～「ある日」の出来事

久美子は、哲夫を「教室の子供たち全員に嫌われている」「不幸な人」ととらえ、「不思議な意欲がわき上がり」って近づいていく。そして、話しかけてもつれない態度ばかりの哲夫に対し、「好意を受け取ることのできない人なのだ

なあ、と私は残念に思い」、「私を嫌いになる人なんているわけがない」と「ますます意欲を燃やす」。たやすく心を開かず、一筋縄ではいかない哲夫を攻め落とすことが叶えば、久美子はますます自己像を強化し、幸福感を得られるためである。この「意欲」は一貫した強固なものであり、後に「私が、あなたに話しかけなきゃ、絶対にだめだって思ったの。」という、自分こそが哲夫に好意を受け取らせることができるのだという自負の言葉としても示される。語り手はそうした当時の思いを「思い上がり」だったと振り返っているが、ここで注目すべきは、当時も現在も「私」の関心の対象は自己像の強化にあるということである。哲夫の意固地な態度が何に由来するものであったのか、哲夫は本当に「不幸」だったのかというような、哲夫自身に関する理解へつながる疑問に、当時のみならず現在に至るまで、語り手はついに及んではいない。久美子が哲夫に対して早々と「不幸」というレッテルを貼り、自分にとっての意味づけをして満足したように、語り手もまた、哲夫を「ある日」の出来事によって自分に成長をもたらした存在として意味づけることで完結しているのだ。こう考えると、久美子及び語り手の哲夫に対するとらえ方が、自己像の強化の欲求という観点において、読みを進める重要なポイントとなることがわかる。

これについて相沢毅彦氏は、以下の三点を根拠に、「久美子の中で〈自己化〉された哲夫との出会いでしかなかった」とする（4）。なお、①～③のナンバリングは仁野平が付したものである。

① 問題の一つとして、まず久美子が他者である哲夫の言葉を受け止めきれていなかったのではないかということがあげられる。（中略）哲夫の批判は、久美子が「良い人のふり」をしていることが、哲夫を含め皆に気づかれており、そのため久美子は「誰からも」秘密を教えてもらえないことを意味している。（中略）それにもかかわらず、久美子は「ここでも成功していた」と考えているのであり、哲夫の批判が届いていなかったことがわかる。（中略）注目すべきことは、九歳の久美子がそのことに気付いていないだけでなく、語り手の久美子もそのことに気が付いていないということである。「人生を軽く見ていた」自分といったことには批判的に語っていた語り手だが、クラスの仲間から信頼されていたかどうかということに関する批判は一度も見られない。

②また、「夕方の海」を見た時の哲夫との対話の擦れ違いについても指摘しておきたい。（中略）哲夫は久美子が「思いつき」で口にした「結婚する」という言葉を現実的なものとして受け止め、（中略）「海の方の子」である

自分の生きている〈場所〉は「苦労が多い」と久美子と自分との人生のバックグラウンド（生の文脈）の違いを問題にして「結婚できない」と答えているからである。（中略）久美子が「結婚」についての話をしたときにはすでに擦れ違っている。二人は同じ風景を見、同じ「夕方の海」というイメージを抱きながら実際には違ったものを見ていたのである。

③同様に、「夕方の海」を見た後、哲夫が「怒ったような表情を浮かべたまま」である哲夫に向って久美子が「もっと素直にならないと駄目だよ」と話すことについても考えてみたい。哲夫の「怒ったような表情」については前述したが、「結婚できない」と思える久美子から結婚の話を投げかけられ、複雑な思いでいる哲夫はこの時も哲夫自身としては素直な表情だったと思われる。しかし、久美子はその表情を素直だとは感じず、「素直にならないと駄目だよ」とアドバイスしており、ここに二人の擦れ違いを見ることができる。

こう指摘した上で相沢氏は、この三箇所ともに「九歳の頃の久美子と哲夫だけではなく、それを語る語り手もそのことに対し自覚的でなかった」とし、「成長したはずの語り手も、久美子と哲夫は発していた言葉の擦れ違いや認識の不一致といった問題には無自覚であり、その意味では九歳の頃の久美子と変わってはおらず、成長していないのである」と語り手を解釈する。

確かに哲夫は、②のように、むしろ彼の方が久美子よりも「大人」なのではないかと感じさせる存在である。しかし、「私」が語るという形態である以上、哲夫の思いを事実として特定するのは困難であり、一人称語りの小説の読みのあり方としては、語りから久美子の姿を読むことがまずは優先されるべきであろう。したがって、推定される哲夫の思いをベースにして久美子との関係性を実態としてとらえ、「擦れ違い」であったとするよりも、哲夫の言葉に対する久美子の反応とそれを語る語り手の言葉、すなわち語りそのものに注目し、久美子及び語り手が哲夫をどのように受容し、また、哲夫との出会いによって何かが変化したのかについて読み取ることが必要なのではないか。

また、「それを語る語り手もそのことに対し自覚的でなかった」との解釈が、①の「クラスの仲間から信頼されていたかどうかということに関する批判は一度も見られない」という、語られていないということに依拠するのは、「作品内の文脈に照らして」「〈見えないもの〉を掘り起こす」という相沢氏の方針に基づいてのことであろうが、ま

ずは、語られていること、すなわち、テクストの語りそのものを根拠として読み、次いで、語られて然るべきところであるにもかかわらず語られていないことに注目するのが、「作品内の文脈に照らして」読むことではないか。

例えば①の場合、既に前項「（一）冒頭〜静岡で」で指摘したように、子供たちの人間関係を把握する能力についての誇らしげで得々とした語りにおいては、語り手の思いと久美子の思いは同一であり、同じく人間関係形成に関する「私のいつものやり方は、ここでも成功していたようです。皆、私のことを、本気で慕っていたのです。」という部分もまた、当時から一貫する自覚として語られている。この部分から、過去の自分を批判する語り手が自覚するほどには、久美子と語り手との距離は離れていないことを指摘できよう。

それでは、哲夫の言葉に対する久美子の反応と、それを語る語り手の思いについて、具体的に検討する。「ある日」の出来事の中で、哲夫は自分の考え方について三つの発言をしており、それらは、久美子の自分は大人であるという自負にも関わる可能性を含んでいる。そのそれぞれについて、九歳当時の久美子とそれを回想して語る語り手の受容のあり方を考察する。

まず一つめに、哲夫の両親が既に亡くなっていることを知って謝る久美子に対し、哲夫が発した次の発言に対する久美子の対応を考える。

「…学校のやつらと口をきかないのは、あいつらが、おれをかわいそうだと思い始めるのがめんどうなのさ。人をかわいそうだって思うのって気持ちいいだろ。冗談じゃねえや。おれ、そんなら嫌われてたほうがいいや。あんな学校のやつらなんて、おれ、ターゲットにしてねえもん。」

この発言で、哲夫はまず、「学校のやつら」と口をきかない理由として、「かわいそうだ」と思われたくないからだと述べ、次いで「人をかわいそうだって思うのって気持ちいいだろ。」と続けている。哲夫はここで「人をかわいそうだと思」っている人物として久美子を名指ししてはいないが、「気持ちいいだろ」という問いかけは、「かわいそうな人間に手出しをしないほうがいいぜ。」という発言の後に続いている以上、「学校のやつら」の中で唯一哲夫に関わろうとしている久美子を指しているのは明らかであり、哲夫を「不幸な人」と認識する久美子にとっては、たとえ直接的に糾弾されていなくても、哲夫によってその偽善性を見抜かれたうえでたしなめられたのだと気づくのに十分な

内容を含んでいる。にもかかわらず、哲夫の用いた最後の言葉の語義という些末な部分に反応し、「ターゲットってなあに？」と問い返しているのは、久美子が哲夫の言葉の本質を理解していないからであるといえる。哲夫に近づこうとして無視され、「この年齢にして既に不幸な人」と感じながらも、その直後には「くるりと反対方向に向かって歩き始め」て帰宅し、「大好きな」季節の中の「暖かい湯気」に包まれた自分の幸福な世界を実感するのは、久美子の「不幸な人」に対する興味が、とりもなおさず自らの幸福を顕在化するための手段でしかないことを意味している。「不幸な人」に好意を「与えてあげる」ことのできる自分が、資質にも環境にも恵まれているのだと感じるには、比較対象としての「不幸」な存在が不可欠だからである。つまり、久美子の関心は自分の置かれた状況にあり、哲夫を「不幸な人」とみなすこともまた、自分にとっての意味しかもたず、久美子にとって哲夫は「不幸」という区切られた存在として完結しており、その「不幸」の中に立ち入る発想がない。このことは、久美子が繰り返し泣き出す理由にも顕著に表れている。まず始めに、哲夫の家まで一緒に帰ることになり、自分の思いやりを受け取ってもらえないと悔しくて涙ぐむ。次に、自分の帰り道がわからず不安になって泣く。哲夫に自分が悪人だと言われて泣く。すべては自分中心の理由であり、久美子は常に自分だけを見ているのだ。哲夫の両親がなぜ亡くなったのか、海の方の子はなぜ苦労が多いのか、というような哲夫自身に関わる疑問は、久美子には浮かばない。それでは、語り手はどうか。このやり取りの前の部分では、哲夫の両親が亡くなっていることを知った久美子の思いが「なんと言葉を返してよいのかわかりませんでした。」と語られ、また、哲夫に促されて暗くなった周囲を見渡したところでは、「私は、急に心細くなって泣きそうになりました。」とあるにもかかわらず、その間にある、「人をかわいそうだって思うのって気持ちいいだろ。」という哲夫の言葉を含むやり取りに関しての思いは語られていない。この部分を語る語り手もまた、当時の久美子と同様に、この哲夫の言葉を我がこととして受け止めてはいないのである。

二つめに、「おまえみたいなやつこそ、ほんとは、誰からも、秘密を教えてもらえないんだ。」という、久美子の偽善性が周囲の人間に気づかれる可能性を指摘したかのような言葉への反応を検証する。久美子は得心がいかず、「どうして？」と聞き返すものの、最終的には、自分が哲夫に悪人と言われたことに反応し、「なんだか、また悲しくなってきて」ひとしきり泣くのだが、哲夫が自分を慰めないことにあきれて泣いた姿を保持したまま哲夫を盗み見る。こ

の時、哲夫の言葉を自らの偽善性の指摘として久美子が受け止めていたならば、それは久美子のアイデンティティに関わるレベルの衝撃となるはずであり、決してこのように余裕ある駆け引きめいた行動はとれまい。そして、「なんだか」悲しくなってきたという程度の漠然とした受け止め方では済まないだろう。つまり、久美子はこの言葉を、善人であるはずの自分のことを悪人だとする、「意固地」で「不幸」な哲夫のいじわるという程度にしか思っていないのである。こうした把握は、語り手の意識とも一致しており、それは、この部分に先行する、哲夫が「蛇つぶれてら」と久美子を脅かして「嘘だよ」とし、また「眠ったら、死ぬぞ‼」と言いつつ「嘘だよ」とするエピソードに連なる形で、この「おまえみたいなやつこそ」以下のやり取りが語られていることから確認できる。語り手は、嘘をついて人を驚かせたり困らせたりする習癖をもつ子供として哲夫の姿を繰り返し語り出すことで、自らの偽善性を指摘された衝撃的場面となるべきところを、嘘ばかりつく哲夫に翻弄された第三のエピソードとして、無自覚のうちに歪曲化し、編集しているのである。そして、「なんだか、また悲しくなってきて」泣き、「彼の顔を盗み見」た後には、すぐさま「夕方の海」のエピソードへと移ってしまい、「悪人」以外の哲夫の発言内容について顧みることはない。

三つめとして、二人が西日で金色に染まる田んぼを夕方の海のように感じる場面の、「おれの目、片方しかないけど、ちゃんと、何でも見えるんだ」という哲夫の言葉を考えたい。金色に染まる田んぼを夕方の海のようだという久美子の感覚を、哲夫は自らと共通するものと感じて心を開こうとした。ここで久美子は「うん」と答えて哲夫の言葉を受け入れてはいるように思われるものの、その視線は哲夫の「ちゃんと、何でも見える」方の目にではなく「見えていない方の瞳」に向けられており、それを「きらきらと輝く」ものと感じている。つまり久美子の意識は、哲夫の「ちゃんと」見ているものを共有するのではなく、自分が美しいと思ったものに向けられており、いわば自己完結の中にある。こうした久美子の姿を確認したところで、しおからとんぼの件でも哲夫の目について語られていたことを、合わせて考えたい。とんぼのしっぽをくわえた哲夫の様子を、語り手は「私は、彼の片方の目が本物でないことを、今さらのように思いました。陽ざしを通した瞳は、確かにガラスのように美しかった。」と回想していた。哲夫の大きな特徴である、片方の目が義眼であることが重ねて示されていることを勘案するに、語り手による哲夫の目の描写を、見える方、見えない方のいずれかを区別する単純な情報としてだけではなく、久美子、そして語り手の受け止め

方と結びつけて読むことが可能だろう。すると、しおからとんぼのエピソードで「本物でない」と表現されている「見えていない方の瞳」に美しさを感じてその目を見つめる久美子は、本物ではない一側面を見ているということになる。哲夫の見ているものを、久美子は見ていないのだ。先に、このエピソードを「回想していた」としたが、最後の「陽ざしを通した瞳は、確かにガラスのように美しかった。」の一文だけは、当時の思いとしてではなく現在の語り手が回想しながら抱いた感慨として語られている。「確かに」とは、今振り返っても確かに、という意味で用いられており、語り手は哲夫の義眼を思い出して「美しかった」と感慨に耽っているのだ。全編にわたって敬体で語られる中、当時の久美子の心内話と思われる数箇所を例外として、この箇所だけが常体となっているのは、こうした語り手の自己陶酔に由来するものであろう。これらから、久美子のみならず哲夫の「本物でない」方の目に心を寄せる語り手もまた、哲夫のことを受け止めているようでありながら、哲夫の思いとは無関係に「本物でない」ものを見ている、と読むことができる。

（三）別れの場面

最後の場面は、十二月下旬の終業式の日である。直前の場面である「ある日」は、「午後の時間は秋、夕方になると冬に姿を変える」季節で、「しおからとんぼ」がまだ飛んでおり、「稲刈りの終わった枯れた田んぼが、見渡す限り広が」っていたとあるので、十月下旬から十一月初旬ごろであろう。久美子は「見渡す限り水田が広がって」いたころに転校し、その後「ある日」の出来事を経験し、さらに一ヶ月半から二ヶ月近くの時間が経過して、別れを迎えたことになる。

語り手は九歳のころの思い出を、静岡への転校以降、一連の流れとして語り続けているものの、「ある日」から終業式の場面までには、約二ヶ月もの空白が存在している。「ある日」以降、久美子は級友たちや哲夫といかなる日々を過ごしていたのだろうか。まず、「私のいつものやり方は、ここでも成功していたようです。皆、私のことを、本気で慕っていたのです。」との部分に着目すれば、「お友達」と久美子との関係は以前と変わっていなかったと読むことができる。前節で見たように、これは、哲夫の久美子への批判とも取れる言葉が久美子に受け止められていないこ

とと呼応する。それでは、哲夫との関係はどうであったのだろうか。前節の最後に考察した「夕方の海」の場面に立ち戻って考えたい。久美子の「もっと素直にならないとだめだよ。」という久美子の言葉に哲夫が「うん。」と答え、「かわいそうな人に首をつっ込むのをやめたせいか」（傍点ママ）久美子の感じていた心細さはなくなり、最後に「哲夫くんは、もう、私にとってかわいそうな人ではなくなっていたのです。」と語られている。哲夫に対して「素直」でないとアドバイスする久美子は、「哲夫くん。あなたって素直じゃないよ。私は、あなたのそういうとこを直してあげたいの。」と言葉を発した時と同様に哲夫の矯正を志向し、哲夫と共有したはずの「ある日」の出来事は、久美子に変化をもたらすものとはならなかった。したがって、久美子にとって哲夫の「うん」という返答は、だれもが自分の好意を受けとるはずだという自己の主張の正当性を保証するものであり、哲夫に自分の好意を受容させる目論見が成功したことを意味する。久美子自身が「不幸な人」、すなわち「かわいそうな人」というラベリングをして哲夫に接近した以上、「私にとってかわいそうな人」でなくなった哲夫は、もはや関心の対象ではない。つまり、語り手にとっての哲夫の存在意義が「ある日」の出来事に象徴されているからこそ、それは語られるのであり、その後の出来事は語るに足る価値を認められなかったといえる。語り手が「ある日」について語るという行為自体が、語られない「ある日」以降の二ヶ月の意味を浮かび上がらせるという構造を、ここに確認することができる。

四、まとめ

物語内容は物語行為によって読者に伝えられる。全知的視点をもつ語り手が世界のすべてを対象化して語る物語であれば、語り手の存在を意識せず物語没入型の読みを行ったとしても、それは豊かな文学体験となろう。しかし、三人称語りの語り手でありながらも人格的要素をもつ語り手であるならば、物語行為への着眼が必要となってくる。それが、〈主人公＝語り手〉である回想型一人称語りとなると、読者にとって物語行為を読んでいるとの意識は不可欠なものとなる。しかし、一人称語りの語り手は、常に「読まれたい」内容に読者を引き寄せて自己の語りの無条件的受容を求めるがゆえに、読者はかえって物語行為への着眼を失いがちであり、あたかも、語り手に対象化された「当

時」が事実であるかのような錯覚に陥ることが多い。これが、一人称語りのトリックなのである。『海の方の子』は、学習者がこうしたトリックに気付き、自らの読みが変容する経験をもたらす教材であるといえる。高校生読者の共感を得やすい話題、読者を同化させやすい語り口調、語り手の自らの成長に対する自覚、そして高校生はその成長を求める最中にあることなど、一人称のトリックがさらに巧妙なものとなるよう諸要素が機能することがわかるだろう。だからこそ、作中人物としての語り手に注目し、その語りを丹念に読むことによって、語り手が用意した「読まれたい」読みをさらに俯瞰的に読むという観点を得たとき、読みの転換のダイナミズムを感得することができるのである。

〔注〕

（1）平成二十五年度使用予定教科書においては、桐原書店は引き続き『探求国語総合（現代文・表現編）』に採録しているが、東京書籍版の教科書からはなくなった。また、新たに明治書院『高等学校　国語総合』及び『精選　国語総合　現代文編』に採られている。

（2）『新編国語総合　指導書』（東京書籍　平成十九年）教師用指導書ＰＤＦ版より引用。

（3）『探究国語総合【指導資料】第二分冊　小説・詩歌編』（桐原書店　平成十五年二月一日）

（4）相沢毅彦「（見えないもの）を掘り起こす―山田詠美『海の方の子』における試み―」（『日本文学』日本文学協会　平成二十一年八月）

＊『海の方の子』の本文は、東京書籍『新編国語総合』（平成十九年二月）による。「指導上の配慮により」（東京書籍版指導書）、四箇所の削除・修正が施されている。なお、桐原書店『探究国語総合（現代文・表現編）』においても全く同箇所が削除・修正されている。